

電子書籍の最新事情



中村 伊知哉

かつて日本を訪れた外国人は、大勢の大人が電車でマンガを広げている光景に驚いた。海外ではマンガがそこまで定着してはいないし、そもそも子ども文化だからだ。しかしこのところ、マンガを読みふける姿は激減した。みなケータイやスマホ(スマートフォン)の画面を見つめている。紙がデジタル機器に移行している。その中身は、メールやウェブサイトをかもしれないし、依然としてデジタルのマンガなのかもしれない。

電子書籍元年と呼ばれたのは二〇一〇年。アマゾンのキンドル、アップルのiPhoneやiPad、ソニーのリードー、シャープのガラパゴスといった電子書籍を読む

のにふさわしい端末が続々と登場するとともに、アマゾン、アップル、グーグルといったオンラインの書店も世界的に広がった。それまでパソコンやケータイで電子新聞など文字を読むユーザもいたのだが、スマホやタブレットなど新種の端末と、一〇〇〇万冊を上回る品揃えの流通網との組み合わせがシーンをがらりと変えることを予期させた。

紙の本に比べて、電子書籍にはさまざまなメリットがある。まず、場所を取らない。本棚を丸ごと手のひらに持ち運べる。本屋に足を運ばなくても、ネットで即時に目当ての本が買える。在庫管理もコストが低い

から、絶版も少なくなる。拡大機能、読み上げ機能、辞書機能、多言語表示機能などを使えば、お年寄りでも、視覚障がい者でも読みやすくなり、外国人にも理解しやすくなる。紙を使わずエコ、という指摘もある。

しかし、日本の普及度は欧米に比べ低い。環境は決して悪くなかった。ブロードバンドの普及は最高級で、携帯電話のネット利用も世界最先端だった。しかし、文芸書や雑誌など電子書籍のコンテンツは提供が進まず、今も海外に比べ見劣りする。コンテンツの数はアメリカが九五万点であるのに対し、日本は一〇万点に止まっている。

ようやく読書向けの機器が登場し、電子書籍が注目を集めるようになった事態を、日本の関係者は黒船来

襲とみて身構えた。アマゾン、アップル、グーグル、バーンズアンドノーブル。機器も書店プラットフォームも引っさげた船団が現れたのだから、たった四杯で夜も眠れず、文科省、経産省、総務省の御三家が鳩首会談を開くのも無理からぬことだった。

特に大きな話題となったのがグーグルブックスの問題だ。米グーグル社が始めた書籍検索サービスの著作権を巡り、集団訴訟の和解結果が日本の出版物にも適用されることになったため、著作権者や出版社が判断と行動を迫られた。国内の制度とシステムでは最早従来のビジネスを守ることはできないボーダレスな時代に突入したことを認識させる事件だった。

出版業界が本腰を入れるには課題も多かった。一九九六年に二兆六〇〇億円だった市場は二〇一二年に

自費出版ご案内

あなたの本を
文藝春秋で
つくりませんか?

作家・菊池寛は、「人に頼まれてものを云うことに飽きた。自由な心持で云ってみたい」とポケットマネー二百円を出して文藝春秋を創刊したといわれています。つまり自費出版は文藝春秋の原点ともいえるでしょう。「自分だけの本を作りたい」そのお手伝いを私たちがいたします。

※まずは資料をお送りいたします

見積無料

文藝春秋 企画出版部

〒102-8008
東京都千代田区紀尾井町3-23
TEL.03-3265-1211(代表)
FAX.03-3265-1257
http://www.bunshun.co.jp

は一兆七〇〇億円にまで縮小、体力が衰えていた。著作権の関係も複雑で、紙の本を電子化して再販する場合の処理が困難という面もあった。縦書き、ルビといった特殊性を持つ日本語を表記するためのファイルフォーマットの技術問題もあった。

電子書籍の単価が上がらず、採算性にも問題があった。もともと日本は紙の本の品質がとて高く、値段も安い。ブックオフのような中古市場もあり、電子書籍の競争力が発揮しにくい。そこでまずは紙の市場を守り、サブの電子市場をゆるりと作り出そうとしたのだ。だが、紙の本をスキャンした海賊版が増えたり、利用者が買った書籍をスキャンする「自炊」を代行する専門業者が現れたりして、出版側としては、自ら管理するビジネスモデルを作らなければならない事態となっていた。

だからといって、日本は決して取組が遅かったわけではない。一九九〇年代からメーカーは力を入れていた。ガラパゴスと呼ばれるほど特殊な発達をみせた日本の携帯電話は、スマホを先取りしたマルチメディア端末だ。二一世紀の初頭には、日本のユーザは世界に先駆けてケータイで文字を読んでいた。高校生の九六%、中学生の約半数がケータイを持ち、ネットを駆使

ライトノベルに重心が移りつつある。電子辞書もスマホやタブレットが機能を取り込み、この三年で市場が一〇〇億円も縮小している。

こうした状況で業界の動きはめまぐるしい。二〇一〇年二月、講談社、小学館、集英社など大手出版社二社が日本電子書籍出版協会を設立。七月にはソニー、凸版印刷、KDDI、朝日新聞社が合併会社を、一二月にはNTTドコモと大日本印刷も会社を設立するなど、出版、新聞、印刷、通信、製造などが矢継ぎ早に仕掛けを見せた。最近では楽天がkoboブランドで電子書籍リーダーと書店ビジネスに参入している。

これに対し、作家の姿勢もさまざま。二〇一〇年に

するこの国は、ケータイで書きケータイで読む「ケータイ小説」という世界に例のないジャンルをも産んだ。二〇〇七年の文芸書ランキングではトップ三をケータイ小説が独占した。

実は、日本は電子書籍大国なのだ。インプレスによれば、二〇一二年の電子出版の売上は七一三億円。紙の市場の四％ではあるが、小さくはない。二〇一〇年には日本の市場はアメリカの倍以上の規模を占めていた。ただし、その八割をマンガが占めているというのがポイントだ。しかも、その多くはアダルトものだという。書店のレジに持って行くには気が引けるものが電子で一大ジャンルを築いていたのだ。特殊な市場ではあるが、電子書籍のニーズがあることも明らかとなっていた。

もう一つ、日本の特徴がある。辞書だ。日本は電子辞書が高度に発達し、かつ普及している。「ケータイ買って」には渋い顔をする親も、「電子辞書買って」には抗えない。二〇〇八年の出荷金額は四一三億円に上った。教育目的であれば、文字メディアもビジネスとなる。

しかし、マンガ配信も電子辞書も、スマホやタブレット端末に移行していく。アメリカの電子書店ではアダルトものを置いてもみえず、一般的な人気マンガや集と販売を自ら行うこととした。

は、京極夏彦氏は新刊『死ねばいいのに』を講談社から紙と電子の両方で販売。大沢在昌氏は「カルテット」を角川グループから電子書籍で先行販売した。村上龍氏は株式会社G2010を設立し、電子書籍の編集と販売を自ら行うこととした。

価格設定も多様だ。紙の本と変わらぬ値付けもあれば、大幅に安くしたものもある。電子書籍向けに書き下ろした作品を一〇〇円で刊行するものもあれば、長編小説を分割配信し、一回目を無料、二回目以降を有料にするモデルもある。どのような企業と連携し、どのようなビジネスモデルや価格帯に設定するのか、落ちつくまでにはまだ時間を要する。

黒船騒ぎもあり、政府も検討の場を設けた。二〇一〇年、文科省、経産省、総務省が合同で懇談会を開

刀

日本刀専門店

銀座 泰文堂

刀剣買取り
鑑定・見積
無料

東京都中央区銀座4-3-11
銀座並木通り
松崎煎餅ビル4階
定休日〔日曜・祝日〕

☎03-3563-2551

銀座泰文堂 検索

催。これを受け、文科省は検討会議を設置した。筆者は双方に参加したのだが、その結果、ファイルフォーマットの共通化などの施策が採られた。産業革新機構からの出資で「出版デジタル機構」も設立されている。

出版者へ著作権法上の権利を付与すべきとの議論も活発となった。これは学術界に加え、産業界や政治も巻き込んで議論が継続している。筆者が会長を務める知的財産戦略本部コンテンツ専門調査会でも、電子書籍の権利処理を円滑にする方策が審議されている。

電子書籍は未だ原始の段階だ。紙の本をデジタルに置き換えただけのものが大半である。だがデジタル技術は、文字も音声も映像も対等のデータとして扱う。筆者は「デジタルえほん」という会社を立ち上げ、映像、音楽、文字を駆使したコンテンツを制作している。「デジタルえほんアワード」や「国際デジタルえほんフェア」というイベントも開催し、世界の作品を集めている。それらは「書籍」に収まらない新表現だ。アニメでもあり、ゲームでもあり、音楽でもある。電子書籍は、書籍、出版という概念をすぐに塗り替えてしまおう。

教育も変わる。政府は二〇二〇年までに小中学生が

一人一台の情報端末でデジタル教科書を使えるようにする目標を立てている。勉強も社会学習も、電子書籍とネットのコミュニケーションで行われる。そして筆者が事務局長を務める「デジタル教科書教材協議会」は、これを五年前倒しする活動を進めている。想定より早い時期に、子どもも含む国民全体が電子書籍に親しむようになるだろう。

グーテンベルクが活版印刷を発明し、人は書に触れ、沈黙考し、行動を起こし、宗教革命から民主革命、産業革命へと進んだ。発明から三世紀、社会は大きく変化した。今回、その発明から五六五年ぶりに、本が変貌する。電子書籍の狂想曲は騒がしいけれど、これが経済、文化、社会に与える影響はまだわれわれは想像できていない。かつてグーグル社のCEOは、世界の全情報を三世紀かけてデジタル化すると豪語した。三世紀後に達成されるという、地球の知が電子化されて流通する時代のほんの入口にわれわれは立ったにすぎない。未来の知がどう変化していくのか、遠くを空想しながら、手元のディスプレイを楽しんでみたい。

(慶應義塾大学大学院教授・京大・経・昭59)